

(3) FD 講演会（平成 29 年 12 月 20 日）

「新書を読んで書評を書くアクティブ・ラーニング授業 ～三重大学『教養ワークショップ』実践報告」

【企画の趣旨】

三重大学は平成 27 年度から「教養ワークショップ」を全学必修科目としています。この科目は、教員のファシリテーションのもと、新書を一冊以上読み、その書評を書く授業です。この意欲的な取り組みについて、三重大学で「教養ワークショップ」部会長を務めておられる和田正法先生をお招きし、その目的・方法・成果などについて報告していただきます。

【実施概要】

開催日：2017 年 12 月 20 日（水）

開催時刻：16:00～17:30 #センター試験監督者説明会終了後

場所：愛知教育大学 第一共通棟 201 教室

参加対象：大学教職員・学生・一般

講演タイトル：「新書を読んで書評を書くアクティブ・ラーニング授業
～三重大学『教養ワークショップ』実践報告」

講演者：和田 正法（ワダ マサノリ）先生
三重大学 教養教育機構 講師

就職キャリアセンター主催
全学FD講演会

「新書を読んで書評を書く
アクティブ・ラーニング授業」
～三重大学『教養ワークショップ』
実践報告～

2017年
12/20水
16:00～17:30
受付：15:40～

三重大学は平成27年度から「教養ワークショップ」を全学必修科目としています。この科目は、教員のファシリテーションのもと、新書を一冊以上読み、その書評を書く授業です。この意欲的な取り組みについて、三重大学で「教養ワークショップ」部会長を務めておられる和田正法先生をお招きし、その目的・方法・成果などについて報告していただきます。

申込不要
入場無料

会場 本学 第一共通棟 201講義室
講師 和田 正法 先生
(三重大学 教養教育機構 講師)
対象 本学教職員・学生・一般

本学 印刷センター
愛知教育大学
企画課 教養企画教育企画係 TEL 0566-26-2717

【プログラム】

時刻	時間	項目（タイトル）	担当者
15:40～		受付開始	
			司会：幅先生
16:00～16:05	5分	開会あいさつ	西淵教職キャリアセンター長
16:05～16:10	5分	講師紹介	小谷先生
16:10～17:10	60分	和田先生 ご講演	和田先生
17:10～17:25	15分	質疑応答	司会：幅先生
17:25～17:30	5分	閉会あいさつ	野田副学長

【開催報告】

2017年12月20日 全学FD講演会「新書を読んで書評を書くアクティブ・ラーニング授業」を開催しました。



講演を行う和田正法氏

2017年12月20日(水)に、第一共通棟201教室にて全学FD講演会「新書を読んで書評を書くアクティブラーニング授業～三重大学『教養ワークショップ』実践報告」を開催しました。講師には、三重大学教養教育機構講師 和田正法先生を招きました。参加者は、本学教員42人、役員2人、事務職員5人、学生11人の計60人でした。

三重大学は平成27年度から「教養ワークショップ」を全学必修科目としています。これは、教員のファシリテーションのもと、新書を一冊以上読み、その書評を書く授業です。和田先生は「教養ワークショップ」部会長として、この意欲的な授業の運営をしています。

「授業の内容」として、この授業ではグループワークやピア評価(受講生どうしの評価)が取り入れられていること、コピーアンドペースト禁止などの研究倫理教育が徹底されていることが報告されました。

「科目運営」の報告では、この授業では作品の完成度は優先しないこと、その理由として優先すると教員が多くの添削を入れてしまい、受講生の自主性を削いでしまうためだとの話がありました。

講演後の質問時間には、参加者からさまざまな質問や意見が出されました。ある参加者からは、「新書が扱う専門分野に精通した教員でないと、学問的に正しい指導ができないのではないか」との質問がありました。これは作品の完成度と受講生の自主性のどちらを優先するかという問題で教員の意見が分かれることを示しています。今回の講演会は、本学の教員がアクティブラーニングの可能性を考察する良い機会となりました。



講演の様子

(教職キャリアセンターFD 部門長 小谷 健司)

(企画課 教育企画室 教育企画係)

F D 集会の様子

【司 会（幅 良統氏）】

では時間になりましたので、本日の講演会のほうを始めさせていただきます。

本日司会を担当します理科教育講座の幅と申します。よろしくお願いします。

それでは、プログラムに従いまして、まずは開会の御挨拶を西淵理事からお願いいたします。

【愛知教育大学理事・教職キャリアセンター長（西淵茂男氏）】

こんにちは。

相当寒くなりましたけれども、こんなにたくさんお集まりいただきまして、ありがとうございます。

全学FDということで、今回は、新書を読んで書評を書くアクティブ・ラーニング授業ということで、三重大学の和田先生をお招きしてお話を聞くことにいたしました。

三重大学は、ここをちょっと拝見しますと、教養科目の中に全学必修ということで取り入れられて、共通カリキュラムと目的別カリキュラムということで大きく大別されて、共通カリキュラムの中に教養基盤科目と教養統合科目ということで、この基盤科目の中にアクティブ・ラーニング、それから外国語教育、異文化理解、健康科学という分野を持たれて取り組まれているということで、いろんな雑誌等を見ますと、成果も着々と上がっているというふうに拝見しております。本学も学べるべきところは学んでいきたいというふうに考えておりますので、1時間半になりますけれども、ぜひよろしくお願いをしたいと思います。

本当にお集まりいただきまして、ありがとうございます。

先生、よろしくお願いいたします。

【司 会】

それでは、続きまして、本日講演をいただく和田先生の御紹介を小谷先生からお願いします。

【愛知教育大学・数学教育講座教授（小谷健司氏）】

こんにちは。

今ちょうど卒論の時期で、先生方も学生に対して卒論指導などをされていると思いますが、卒論指導をして学生の卒論を添削していますと、何かどちらが卒論を書いているのかわからないぐらいに直さなければいけないことがよくあります。

この三重大学さんの教養教育のシンポジウムに昨年とことしと2年参加させていただいたんですが、三重大学さんでは教養ワークショップという1年生全員に対する必修授業で学生に書評を書かせるという、そういう何かすごい取り組みをやられているということを知って非常に驚きました。日ごろから学生がなかなか文章が書けないなあと悩んでいる立場として、これはぜひ三重大学の先生にお越しいただいてお話を聞きたいなあと思ひまして、和田先生をお招きしました。

和田先生の御専門は科学技術史、科学技術の歴史だそうですが、三重大学の教養ワークショップの部会長をされておられまして、教養ワークショップの立ち上げからずうっと関与されてこられました。きょうは、そのお話をお聞きしたいと思います。

以上です。よろしくお願いします。

【司 会】

それでは、和田先生、お願いいたします。

「新書を読んで書評を書くアクティブ・ラーニング授業 ～三重大学『教養ワークショップ』実践報告～」

講師：和田 正法氏(三重大学 教養教育機構 講師)

こんにちは。和田です。

御紹介いただき、ありがとうございます。

本日は貴重なお時間をいただきまして、お集まりいただきまして、またお呼びいただきまして、本当にありがとうございます。

我々の経験ということで紹介させていただきまして、この科目に関する運営の難しさとか苦しみみたいなのところも共有していければよいなあというふうに思っております。

それで、今お手元に優秀書評集というものがあります。あとそのほかにも資料があります。この優秀書評集に関しては、この授業の成果物になります。また後で少し御紹介させていただきます。

それと私は、三重大学の教養教育機構で教養ワークショップ部会という授業、この科目を運営する責任者をやっております。

さて、本日お話しする内容です。

4点あります。1つ目が、若干、教養教育機構の概要について紹介させていただきまして、そこから授業の内容について触れたいと思います。それと、科目を運営する側の気持ちについて、あとは、この授業を終えてみて関係者の感想ということで、学生と担当教員。

それで、本日、私のほうからお話しするのは1時間というお時間をいただいていますけれども、しゃべるほうが私の癖で、しゃべり続けると、しゃべるのは気持ちいいんですけど、聞いている方々が何か別の意味で気持ちよくなってしまって、何か私自身が催眠術師になることがたまにありますので、きょうはもう、ともかくテンポよく話をさせていただきまして、それでお手元にスライドの資料がありますので、御関心のあるところはチェックしていただきまして、極力、後の議論のほうに時間を回せばいいかなあというふうに思っております。

それでは、内容のほうへ移らせていただきます。

まず、三重大学の学部と研究科は5学部、6研究科があります。それに教養教育機構というのが一応学部と同じ位置づけになっております。このあたりを我々の機構長が意識していて、いや、これはもう学部と同じ位置づけなんだということはかなりこっぴどく言っていますが、最近、また学部とはもう一つ位置づけが下らしいんですが、センターというところで機構の名前を使うところが幾つか出てきてしまいまして、それが機構長は若干気に入らないらしくて、我々はこの機構というのを、もううちらに変えるということになって、来年度から教養教育院というふうに名前を変えることが決定してしまいまして、いずれにしても私が言いたいのは、一応学部と同じ位置づけで全学の初年次を担当する組織としてここにあります。

今、写真を写しておりますのが上空から撮影した三重大学でして、これは南から北の名古屋の方面に向かって撮影したものです。ちょっとこの手前のところ、小さくて申しわけないですけど、大きな建物のあるところが三重大学のキャンパスになります。

それで、我々は最近、避難訓練がありまして、避難訓練という我々が最初に意識するのが津波です。非常に風光明媚なところなんですけど、残念ながらこのキャンパスの、ちょっと大きい堤防があるんですけど、その向こうがすぐに海になっておりまして、私自身も着任して3年がもうすぐで終わろうとしているんですけど、もう何かあると水が襲ってくるんじゃないかなあと悩まされ、私の研究室は残念ながら1階にありまして、何かあるともう水に全

部本をやられるということを恐れながら、データもバックアップしなければいけないなあと思いつつ、いつ、最後にバックアップしたか覚えていないなんていう生活をする、そういうキャンパスのところでいずれにしても生活しております。

さて、機構が立ち上がるのが、組織としてはもうすぐで4年がたとうとしております。そこから準備を経まして、カリキュラムが開始されまして、もうすぐで3年が終わろうとしております。その前に、前学長の強い意向で、教養教育はしっかりしなきゃいけないということで準備が進められたというふうに私は聞いております。

そのときに問題点として上げられたのがこのようなところがあります。共通教育としての明確な教育理念がなかった、カリキュラムは各学部の意向に任されていた、全体のカリキュラムが体系化されていなかった、社会的事情、学内組織の意向等に振り回されてきたと。ですので、ほかの学部等に都合のいいところを全部持っていかれて、残りをやらされるみたいなことがあったようでして、そのために改革しなければいけなかったということがあったようです。それで、責任ある組織がなかったので、この教養教育機構が部局として立ち上がったということです。

加えまして、今、西淵先生からも御説明いただきましたけれども、共有カリキュラムと目的別カリキュラムというところで教養科目が全部体系立てられております。共通カリキュラムの全部が同じことをやるというものでして、それに対して目的別カリキュラムというのは、各学部が教養科目として認識しているものを一応教養科目として位置づけたい、つまり本来であれば専門科目なんですけれども、各学部の認識からすれば、これは教養に位置づけたいという政治的なやりとりの末、でき上がったものが目的別カリキュラムということで、余り私ここで言い過ぎると、ビデオも撮影されていてよろしくないんですけど、多分文字には残らないので、好き勝手に今のうちには言うておこうかと思えます。

それで、機構の教員についてです。今、専任17人、特任9人という小さい世帯で動いております。これが各部から数人ずつ教養科目を、その前に担当していた教員の担当するコマ数にほとんど応じているというふうに聞いておりますが、人文の英語とか外国語を担当しているところが特に多く、ここが主体になっていますが、ここは任期つきで2年から数年の、各学部によって違いますけれども、行ったり来たりということをやっております。また、センターからも何人か集まり、新たに採用して、これは私もこの一人なんですけど、それで全体の機構というものをつくっております。

共通カリキュラムについてです。これは、全学で必ず受けることになる科目です。基盤科目、これはいわゆるジェネリックスキルを鍛えるようなところと、あと統合科目、これは広く学ぶというところになります。それで、この基盤科目に関しては、アクティブ・ラーニング領域、その中にスタートアップセミナーという前期のものと、あと教養ワークショップ、後期に提供するものがあります。きょうは、ここについてお話しするということです。

そのほかにも英語に関するもの、第2外国語、体育に関するものは、この基盤の中に入れております。

また、統合科目としては、これは各学部の先生たちをお願いをして、広く知識を提供してもらおうところになります。私もここにおいて科学史の授業を提供するというのもやっております。

また、機構に所属しますと、スタートアップセミナー、教養ワークショップ、英語のいずれかは必ず担当するということになっています。

目的別カリキュラムはまた別の表でして、今説明したのは共通カリキュラムで、これが卒業単位の26に入れられるところと。あとは各学部に応じまして、目的別カリキュラムというところにそれぞれの教養科目が入れられて、合計として、教養科目は、一応、表としては30中盤から40前半ぐらいのものが卒業単位に入れられるという構造になっています。

それで、特にここの、愛教大もそうだと思うんですが、いわゆる資格系のところが教養科目というのが少なくなっている。例えば、我々でも看護学科なんかは教養科目が少ないという傾向を持っております。全体として言うと平均40ぐらいなんですけど、いろいろ調べると、国立大の中ではもう下から数えたほうが早いぐらい非常に卒業単位数としては少ないということになっております。

アクティブ・ラーニング科目です。これは2つあります。スタートアップセミナーが前期、それと教養ワークショップが後期になります。スタートアップセミナーと類似のものは、こちらでも初年次必修科目があるということと伺っておりますが、恐らく小谷先生からお声かけいただいたのは、それと違う形での我々がやっているものということで、教養ワークショップのほうを紹介するということとお声かけいただいたというふうに認識しております。

それで、スタートアップセミナーのほうは、いわゆるPBLの科目になっています。そこで、私が認識するのは、かなり複雑な状況になってしまっていて、4つの力というDP（ディプロマ・ポリシー）を習熟させる、アカデミック・スキルズについてもここで学ばせる、あとCOC+という地域課題への対応も迫られているということで、いろんなところからこれをやってくれないかということをお願いされて、全部引き受ける科目になっておまして、やっている教員は非常に負担が多くて大変ですし、学生も何をやらされているのかわからないという意見を非常に聞いておまして、いずれにしても大変な科目になって、かなり制度疲労を起こしていて、近々改革されるんじゃないかなあと思いますけど、いずれにしても、ここではPBLで、テーマとしては「三重県や各市町村が抱える課題について、学問的な観点から解決するための実行可能な提案を行う」ということを15回の授業の中で一貫してやるということは目標にはしております。ところが、地域課題なんかをやろうと思っても、選任の教員もいなくてなかなか難しい科目で、このあたりについては後ほど議論したいと思います。

一応ここではグループ活動をやらせておまして、聞く・話す能力の向上、それに対して教養ワークショップのほうでは、今まで読む・書くというのをやらせていなかったんで、ここをやらせたいということで設置されたと聞いております。

それで、こちらのスタートアップセミナーのほうはもう9年目でして、非常に伝統のある科目で、時折学会などでも発表していますので、お聞きになった先生ももしかしたらいらっしゃるかもしれません。教養ワークショップのほうは、今3年目がちょうど動いているところの若い科目です。

両方の科目をちょっと比較的に述べますが、担当教員の概念図です。この幅がいわゆる1人の教員が担当するコマの数というふうに捉えてください。こちらは担当5人で、専任と特任という非常勤の教員がいますが、それら5人で全部で31クラスを運営しています。ここで同じ学科の学生を集めて40人ぐらいの体制にしております。

教養ワークショップのほうは、それに対して、44クラスありますけど、その1つのクラスが複数の学科を集めまして運営しています。1つのクラス30人に対して21人の教員で担当しています。このとき、ここは私が当たるところなんですけど、3つのコマを担当している教員と、あとこちらで6コマを担当している教員、あとは1コマずつの担当の教員ということになります。ここでは、多いコマでは7とか8とかというのを担当することになっています。

ここでちょっと大きな問題が、1人、今期産休で休まれている先生がいらっやまして、ヘルプのために私が入ったんですけど、非常に複雑な科目なので担当するのちょっといっぱいいっぱいにして、私はおなかいっぱいになってしまって、幸い復帰されるということで来年からは担当しなくていいんですけど、1人が担当する科目が多いとなかなか万一の場合に大変というような、そういう構造も持っております。

ここからは、授業の内容について御紹介いたします。

教養ワークショップの授業の全体の流れです。教員のファシリテーションのもと、半期で新書を読ませて書評を書かせます。文章の読解・要約・作成に関する解説に加えて、ですので講義も入れるんですが、主体としてはグループ活動を行っております。学生は毎回読書シートを作成しつつ本を読み、こういう読書シートですね、いわゆる読書メモです。それに基づく討論、授業に持ち寄って討論をしつつ、また書評をつくり上げてからも、このグループ内でお互いに読み合わせてピアレビューをさせるということをやらせています。その結果、書評を作成するんですが、単なる感想文ではなくて、他者に紹介をするべく的確な内容の要約と、みずからの見解の論理的に述べるということを目指しております。

クラス・グループ編成になります。1,350人が1学年でいます。これを1クラス30人、5人掛ける6グループというものが標準になるようにしています。各クラス・グループは、複数学科の学生で構成するようにしています。特に、必ず文系と理系がまじるようにしています。

ここでお示ししたのは、私の担当している授業の例です。火曜日と木曜日の授業があります。それで、ここの授業では人文学部の法律経済と生物資源、こちらでは人文の文化と工学部と生物資源学部、教育学部と医学部という組み合わせになっています。

到達目標です。これについては、シラバスに書いてあるものをここではそのまま紹介させていただきます。

新書を読み、その要旨を文章にして読み手に伝えることができる。自分の見解を根拠とともに示し、論評としてまとめることができるということで、この2つに関しては書評のでき上がりに関する目標になります。

もう一つが、これは授業の方法論に関する目標です。グループ学習やピアレビューを通して、他者の文章を論評すると同時に、他者からの批評を受けて自分の文章を改善する方法を学び、それを実践することができるということです。

これを達成するために、まず授業計画としてはこのようにしております。全部で15回があります。大きく分けまして、ビブリオバトルというものを2回入れています。ビブリオバトルは、5分間の時間で、何でもいいんですけども、本を紹介しつつ自己紹介を行うというゲームです。これは、まずは最初にグループをつくって、その中でアイスブレイクのために1回目は行わせています。2回目のビブリオバトルは第7回の授業です。ここを境目として、前半と後半に分けることができます。

前半では、まず各自が好きな新書を持ってこさせまして読ませます。それで、この2回目のビブリオバトルのときに班で1冊の新書を選ばせます。このときにビブリオバトルの形式をかりるということです。それで、1冊が決まったら、それをグループの全員にそろえさせて、そこから具体的に書評を書くという作業が始まります。第14回の授業で最終稿を提出させますが、それまでに何度もお互いに読み合わせる、何度も書き直しをさせるということをやらせています。

実践内容になります。これは、右の読書シート、アドバイスシート、書評の評価シートについては、お配りしている資料の最後のほうに恐らくとじ込んで、それか別にとじ込んでいただいていますかね。

同じところに、最後のほうにとじ込んでいただいていますけれども、10枚ずつぐらいをワークシート集としてとじ込んで、これは生協で学生に買わせるということになっています。このとき、まず読書シートというのをういて記録を授業時間外で作成し、それを授業に持ってこさせて、グループで確認させるという、そのときの作業にこの読書シートというのをういています。

それで、お互いに今度は読ませて批判させるんですが、批判しろと言ってもなかなかしなくて、実際のところはかなり褒め合いになってしまいます。ですので、ポイントをちゃんと指摘できるようにアドバイスシート、ここに

はアドバイスする確認項目というものが印刷してあって、一応これに沿って確認し、足りないところは批判しなさいということで用いております。相互の助言をこれを用いてやると。

そうしまして、書評ができ上がったからは、相互の採点のために書評の評価シートを用いてグループの内・外で採点させ、特にグループ外のものは、本来の書評そのものは、新書を読んでいない学生の人に書評を読んでもらって、その感想を受けて本が読みたくなったかどうかということと認識していますので、これの点数を成績のほうに反映するというをやっています。

成績の評価についてです。これはシラバスに記載してあるものが、まずこの最初の一文です。授業への参加と課題の提出60%、グループ学習への貢献度と提出物の内容など40%を総合的に評価するというものです。このために、少し図式的にしますとこういうことです。基礎点が60%で、とにかく授業に来て課題を提出すれば単位がとれるよというふうに説明しています。そこで点数を上乗せするためには、追加点ということで、グループ学習に貢献してもらい、また提出物の内容のいいものを書いてくださいということで言っております。

ここで、特にグループ学習については、いわゆる授業態度ということですが、1人の教員がなかなか評価しがたいので、そこでお互いに学生のグループ内で評価を合いまして、それをピア評価として成績のほうに反映させています。また、提出物についても、書評ができ上がったやつは当然教員も読みますが、それはまた学生間で採点させて、それも成績に反映させるということにしております。

このときに、この下の部分、ピア評価について、次のスライド2枚で補足説明いたします。

まず、グループ活動に関してです。大きく分けて3つの項目について学生間で採点をさせています。1つ目が事前学習への取り組み、つまりいわゆる努力面に関するものです。2つ目がグループ学習への貢献ということで、いわゆるグループ学習に関する実力面。学習姿勢への態度ということで、いわゆる人格面について、それぞれ1人の学生に対して10点満点で採点させるということになります。実際にはMoodleというLMS、いわゆる掲示板みたいなものを用いまして、その上で入力をさせています。

ここで今表示していますのは2番目のグループ学習への貢献というところで、ちょっと字が小さくて申しわけないんですが、本の内容について質問をしたり答えたりしているか、また書評の改訂に有用なコメントをし、受け入れているかということが認められれば点数が高くなるということです。ここに班員の名前が表示されるようになっていまして、自分も含めて班員全員を10段階で、一回でこれらについて採点するということになります。

このとき、一応我々は10段階で成績をつけておりまして、これと対応するような形にしています。つまり5以下は不合格だなあと、6以上になったら合格と。このときに、7を普通によいものとしましょうと。そこを基準にして、よければ8以上にするとという指導をしまして、極端に甘過ぎるものとか厳し過ぎるものがないように、一応、口頭では説明をしております。

2つ目のピア評価が書評の評価シートに関するものです。これはいつ用いるかという授業の終盤で用います。第13回の授業では、班内のメンバー4人、大体5人の班をつくるんですが、ほかのメンバー4人に対して採点し、また4人から採点をされるということになります。採点を受けて、また書き直しをして、今度は第14回の授業で班外の学生3名に対して採点を行い、また採点されということになります。このとき、この採点項目、必要がありましたら、また後ほど御質問をいただければお答えしたいと思います。

また、研究倫理教育も実施しております。教養ワークショップでは文書作成が柱ですので、特にコピーの禁止に重点を置いています。必修の事業で全ての学生に対して、1つ目として研究倫理の概要を教え、また2つ目でコピーをさせないために適切な引用方法を教えて、しかも繰り返し練習させるということをやらせています。これによ

って、三重大学ではコピペ禁止の教育が行き届いていることを保証することができます。ここでお示ししたのは、その概要を説明するためのスライドの例になります。

それでもう一つは、コピペをさせないための方策と、あと練習させるためということですが、これは講義の部分で説明をしつつ、また繰り返し練習はさせております。またあと、読書シートに関しましても、これは手書きでさせるんですが、コピペをさせないということの意味も持たせています。つまり、書評を書く際に、新書からそのまま抜き書きして書評を仕上げたくなるんですが、そこを、狙いとしては、手書きで自分の言葉にまず書きかえなさいと。書評を書く際には、まず読書シートのほうに戻る。必要に応じては、そのページ数とか書いてあれば、当然新書に戻ることはあるんでしょうけれども、少なくともコピペをいきなりやろうという気はなくなるんじゃないかなあとということを考えています。

また、これはワードで最後は提出させるんですが、最終稿はコピペルナーでチェックして、コピペがないということも確認しております。

ちなみにですが、今ここに座っていらっしゃるのはちなみに失礼ながら学生さん方なんでしょうかね。何かさっきコピペを使っているとかって、ちょっとうわさ話が聞こえましたが、これは当然、友達のやつも相等性を確認し、かつ先輩でも同じ新書を使っているという例がありまして、その新書ごとの相等性というものも確認し、かつネットからのコピペみたいなものもすぐわかるようになっていて、相等率が高いものが万一見つかったら、徐々に点数を下げる割合を大きくし、万一そっくりとなったら、その単位が出ないというような、そういう仕組みになっております。

書評についてです。決まりごとは、分量が1,600から2,000字、1,600書ければ一応単位が出る程度で、2,000字を目指してくださいということによっています。書評の対象が新書、推薦図書を約100冊示していますが、ほかのものもいいですよというふうに言っています。2年が終わった段階では推薦図書を選ぶ学生の割合がどんどん減っていった、半分ぐらいの班が推薦図書を選び、ほかがそうでないものを選んでいきます。

導入、紹介、論評の3部構成を指示しています。それで、各クラスで1つずつよいものを教員の評価によって選びまして、それをまとめたものが優秀書評集になります。

それで、ここでは、後でまた御説明いたしますが、教員の手はほとんど、例外的にはちょっとあるんですが、ほとんど加えられていません。ですので、お読みいただきますと、まだまだだなあとと思うところがありますが、これは学生の手だけでお互いにチェックして、それで選ばれたものになります。とはいっても、あくまでもクラスの1番のもので、かなり読み応えがあると思います。ぜひ皆さんも、読んだことがある新書がおさめられていると思いますので、ぜひお時間のあるときに読んでいただけましたら幸いです。

それで、このときに、推薦図書として、ことしはたまたま92冊でして、これは学生に選ばれやすい上位10冊程度は毎年入れかえています。教員側の狙いとしては、選ばれるやつは、やっぱりこの翌年も選ばれる可能性が高くて、コピペも出るかもしれないなあとということを狙って、売れ行きのいいやつは入れかえようかということをやっています。

感触として、余り先輩のやつを読もうという気は学生はしていないような印象です。推薦図書はあくまでも参考ということなんですが、こちらの狙いとしては、入手しやすくするために、生協で取りそろえて、いつでもここに書いてあるものだったらすぐ入手できますよということによって案内しています。また、附属図書館で閲覧用を配架し、これは貸し出しできないようにしてしまっていて、ここに載っけてあるものであれば、必ずすぐチェックすることができるように、こちらのほうとしては手を打っています。

学生に選ばれた本です。これは去年のものです。全体で266のグループがありまして、124種類の新書が昨年では選ばれました。このときに、今ここにお示ししている表は優秀書評集におさめられている数の多い順にここで表示しています。つまり、一番多いやつは3つの班から3つの書評がおさめられていると、この「考えないヒト」についてですね。あとは、これが推薦図書かどうかということと、実際に書評について班が何班あったかということを示しています。

このときに、どういう本が選ばれているかということによって、学生がどういうことに関心を持っているかということも読み取ることができるように思います。すなわち、「考えないヒト」ですとか、「他人を非難してばかりいる人たち」「人はなぜ逃げおくれるのか」、これは心理学系のものなんですけど、「サブリミナル・マインド」「やっぱり見た目が9割」「愛着障害」「ヒトの本性」というように、かなり学生というのは心理学のことに関心があるなあということがわかります。

優秀書評集に選ばれるのは、基本的には本がおもしろいというものが当然選ばれるわけですが、たまにそうではないというものが選ばれることがあります。その一つの例としてお示しするのが、辛酸なめ子氏の「女子校育ち」というものです。これは35ページに書評がありまして、機会がありましたらぜひ読んでいただければと思います。この書評を読みますと、これを選んでしまって、学生ががっかりして、これはまずいぞと思ったみたいなのを読み取ることができます。

ちなみに、一回ビブリオバトルで選んでしまったので、班では、もうよほどのことがなければ、そこから変えることができないんですね。ただし、そこから、じゃあ批判で全部埋めるのかというわけではなくて、こういうだめな部分もあるんだけど、だめな部分というか、学術的ではない部分もあるんだけど、そこでこの本を捨て去っていいのかというと、そうではなくて、ほかのいろんな人にも読んでほしいというところでまとめていると。つまり、この本書のよい点、書評としての本来やるべき役割をきちんと果たしているということですね。単なる批判とか感想で終わらせるのではなくて、本書の意義を見出す書評として完成しているということが確認していただけるというふうに思います。

ここからは、科目の提供側としての、私の気持ちをちょっとここに詰め込んだんですけども、科目の運営に関するものをお話しさせていただきたいと思います。

教養教育機構に関しては、いわゆる文章を教える教育を専門にしている教員という者がいません。あえて言うと、私が科学史と、また別に作文教育というものをやっているわけですが、大体の人は学部、専門をそれぞれ持っている先生たちをお願いするようになります。ですので、標準化というものが大きなテーマになります。統一的な授業を提供しつつ、教育の質の向上ということをやっています。

取り組みとしましては、まず教養教育機構のアクティブ・ラーニング推進室というところがありまして、これは教養ワークショップ部会のさらに1つ上の組織になるんですが、そこで学内との連携というものをやっています。ここで運営方針を策定し、教養ワークショップ部会で授業内容の立案を行います。立案といっても、6人で構成されるんですが、結局、私がほとんど立案してまして、それを部会のメンバーに、これでいいですかねということを確認とって、それでほかの先生たちにも配るといような構造です。

担当者が21人いて、全員で授業方針を確認する研修会というのを夏に、つまり後期が始まる前に1回、年に1回だけ全員が集まるという機会を設けています。そこで確認し、かつ教養教育機構のFD研修会が月に1回あるんですが、そこで年に2回なり3回とかは教養ワークショップで持たせてもらってまして、そこで課題を共有したり、あと改善の提案があったら、また教養ワークショップ部会のほうに持ち帰るといことをやっています。

また、我々のほうでつくったスライドについてはMoodleとLMSで配付をしまして、それがこの担当者用の掲示板になるわけです。ほかにも、授業が終わったら教員アンケートを実施して、この1年を通してのPDCAサイクルというものも回しています。

今お示ししているのが、開講時限・クラスの担当教員別一覧の雰囲気だけちょっとお伝えしようと思って、非常に細かいんですが、こういったものを提供しています。ここで、左のカラムに教員の名前がありまして、この教員は6コマ持っていて、火曜日と木曜日の時限と、そこに学部と学科、そして学籍番号で割り振られていて、おおよそ30人ずつの学生が割り振られています。そして、私の名前は、ここに和田とありますが、あとほかの先生たちには1コマずつお願いするという構造になっています。

デジタル支援機器を用いています。といいますのも、文書を書かせる授業ですので大量の紙が発生します。1つのクラスで500枚を処理することになります。ですので、まずは先ほどお示した読書シートに関しましては、この左上のところにQRコードがありまして、また学籍番号をOCRで読み取ることができます。できるというのは、我々は富士通を使っていますが、そこにちょっと機能を拡張して、スキャナーで読み込ませるとOCRだのを読み取ることができるようになるんですが、それをやりますと、教員が採点したりコメントしたものをすぐにスキャンで読み取って、オンラインコースにアップロードするということが可能になります。ここで学生の迅速なフィードバックと簡単な管理ができるようになります。

またあとは、普通紙に印刷することが可能なマークシートに関する廉価なソフトがありまして、ここで採点に関するものというものも、独自にマークシートをつくって、すぐにこのスキャナーで読み取り、エクセルで集計することができるようになります。

複合機だの、こういったものを導入して一番大変なのは、私を初めとする運営側の人でして、私は非常に辛い思いをしているんですけども、多くの先生に関しては総合的には楽をしてもらっているようです。

担当者間の調整ということで、どこを統一するかに私が気を配っているかということについて御説明いたします。

まずシラバスについて、これはもう絶対外せないところでして、授業計画と成績の原則については、ぜひ先生方よろしくお願ひしますと言っております。あと課題の量ですね、書評の2,000字と読書シートの提出が7回あるんですが、これはさすがに変えてもらおうと授業間の混乱みたいなものが生じるかもしれないと考えています。あと授業案については、スライドと教員マニュアルを部会のほうでつくって全担当教員に提供しています。これについては、あくまでも参考ということにはしています。またちょっと御説明いたしますが、とにかく、何も知らないでもスライドを読み上げると授業が運営できるというような体制にはしております。

ここの成績の原則と実際はどうなっているのかということですが、シラバスのほうで示しているのは、授業への参加と課題の提出60%、グループ学習への貢献と提出物の内容40%ということなんですが、それをどう解釈して評価するのかということに関して、これはあくまでも運用例として担当の教員に提示はしております。これは学生には、聞かれれば、こういうふうには動かしているよと答えることはありますが、積極的に開示はしていないものです。

といいますのは、担当教員によって、こう書いてあるけど、実際どうしたらいいのかという質問を受けることがありまして、部会としてはこのように大方やっておりますという説明をして安心してもらう材料にしています。このときに、いわゆる基礎点はこのカラム、貢献度、追加点のところはこのカラムとしますと、それぞれ課題、例えばグループ学習ですとか提出物の読書シート、書評に関するものというのは、それぞれにまたがるんですけども、大体このくらいの点数で配分されるんじゃないかなあということで、ここでは示しているということですね。すな

わちグループ学習、ともかく来てグループに参加すると、これが全体の割合でいうと30%ぐらい、そして提出物に関するものが30%と40%でかなりの重きがあります。

教員へ配付しているものとして、スライドとマニュアルがあります。ここでお示ししているのはマニュアルに関するものです。2ページ分をここに張りつけました。スライドそのものは、15回分を各回10から20枚ぐらいにして提供しています。マニュアルで示しているのはそのスライドで、ですので、このスライドが左のところになります。それと、注意事項が次のカラムと、あと目安になる時間というものを、これでやってくださいということにしています。注意事項に関しましても大したことは書いていなくて、補足説明程度のものです。ここに書いてあるもの、ちょっともうごちゃごちゃしているんですけど、情報量はかなり多いんですが、ともかくこのスライドを表示させて読み上げてもらうと、この授業が運営できるという程度にはここに書き込んで説明をしています。ということを提供側として意識しているということですね。

欠席学生への対処に関することです。原則必修授業ですので、欠席した学生とかは非常に見えやすくなっています。各学部のほうからお願いがあって、むしろ各学部のほうが誰が来ていないかということが把握しづらいということで、それではじゃあ全学で、この授業で欠席の学生というのを一括してまずは把握するようにしようじゃないかということになりました。このとき、原則として毎回メールで学生に連絡するというのを担当の先生にお願いし、かつ3回連続欠席した場合には学生の欠席情報報告書という、この右のようなフォームに書き込みまして、ある部局に投げます。そうすると各学部のほうに行きまして、その学生を、いわゆる担任の先生から把握してもらうという構造になっています。こうしたことにもこの授業を利用してもらっています。

授業終了後の作業としまして、こういったことを担当の先生たちをお願いしております。ちょっと細かいことは言わないですけど、例えば不合格者の調査数とかというのも成績をつける前に報告してもらいまして、とある授業では、例えば、こんなこと今までないですけど、10人落とすなんてことがあると、さすがにちょっとまずいので、若干相談させていただく機会をこのところで設けております。

書評の課題を導入するに当たってというのは、授業が決定する前のもう数年前の話ですね。何で書評をやることになったのかということについてのお話です。当然レポートを書かせればいいんじゃないかと、これを教育すればいいんじゃないかという話もあったということで聞いておりますが、さまざまな分野で形式が異なるということで議論があったそうです。テーマの選択が難しいし、教員の負担がふえると。どういう課題について、読ませて、やらせればいいのかということで、なかなか統一的な授業はやりにくいということで、書評という話があって、ああ、じゃあ、それをやらせてみようということになったようです。

そのときに、本を読ませることができると、要約する力をつけられる、ないしはつけさせたいという要望が、特に卒検を担当される先生からはあったようです。ところが、今のところ、結果としては精読のみで、多読というものはできていません。これは今後の課題かと思っています。

内容の確認というものも本来やらなければいけないんですが、これに関してはグループ間のディスカッションをやらせることで、一応、新書は学生間で正しく読めたということにはしております。本来であれば、教員が全部選ばれた新書は目を通すべきなんですけれども、実質そこまではできておりません。何しろ2年動かした段階で、むしろ教員が指導する際には新書の内容を知らないほうが、知らない立場として、これ、ちゃんと説明しないとわからないよということを指導することができるということで、読まなくていいんだというような意見も出てきております。

あと、幅の広い書評のスタイルということが、逆にちょっと問題になっております。我々研究者の間では、当然、学術雑誌なんかには書評を書くわけですけども、一般的に書評というとかかなり文芸寄りのジャンルになっておりま

す。ですので、必ずしも書評をやりましょうという、参考にするものが学術的なものがなかなか見つかりにくいということです。ですので、我々としては3部構成で、せめて導入、紹介、論評ぐらいの構成にしてやればいいんじゃないかということで、ひとまずこの枠組みを持つようにしました。ところが、やらせてみて、人に読ませる文章の書き方を意識させるというのは、この書評のやり方でもできるんじゃないかなあということで、今のところ落ちています。

ちょっとスライドを戻しますが、導入と紹介まではある程度の質のものを書けるんですが、さらに個人の見解を足すところになるとなかなか難しいという議論がかつてありました。そのためにどうすればいいのかということも議論しています。レベルを1から3までもしも分けたとしたら、著者の主張に対して、評者の意見とか感想が述べられていたらレベル1、つまりここは感想文のレベルということですね。

それに対して研究者レベルだと、恐らくレベル3まで持っていくんだと思います。著者の主張に対して、当該分野の到達点をもとに評価が下されている。その分野の中での新書の位置づけがなされている。ですので、1冊だけ読むのではなくて、その著者に関する本というのは本来全部読んだ上で、この新書を何で著者が書いたのかとか、その分野でどういう意味があるのか、何が新しいのかと本来は書くべきなんですが、そこまでさすがに学生に、この必修の1年生の授業でやるのは酷だろうということで、現在ではこのレベル2というところで授業としてはいいんじゃないかという合意がなされています。

すなわち、著者の主張に対して、評者の意見を述べ、かつその理由づけがなされていると。その理由づけに関しては、合理的な理由であれば、場合によっては個人の体験とか聞いた話とかでもいいんじゃないかなあということで考えています。当該分野の専門レベルから十分な評価がなされているわけではない。ただし、感想では終わらせていないということです。それで、当然ここではやはり論評部の差はつくんですが、ここは成績をつけるときの優劣をつける基準になる判断の材料になるということで、よいんじゃないかなあというふうに考えております。

次は、科目の運営者として心がけていることです。教員による添削は最小限にしてほしいなあというふうに私のほうでは考え、先生方をお願いしています。この辺が先ほど小谷先生からお話いただいたところへと関係するかもしれません。ただ、指摘は大いに結構なんで、授業では指摘してやってくださいというふうには言っています。というのも、学生がみずから自分たちで成長できるということを気づかせるためです。ピアレビューのハードルを下げさせて、単純作業を繰り返して行わせるということで成長ができるということを狙っています。

書評の完成度というのは、この授業では最優先事項ではありません。ここで書評の完成度を最優先事項にするとどうなるかという、先生がやる気を起こしてしまって添削をしてしまうということが十分に想定されます。そうすると、今度は学生のほうが甘えて、赤で直されたやつを、逆に言うと、それしか直してこないで、また次に持ってくるということが考え得るわけですね。学生が甘えて、結果、何も考えずにまた持ってきて、全く成長していない、つまり学生の成長が抑制されるということが考えられますので、添削は余りしないでくださいというふうに言っております。この点については、また次のスライドで御説明、補足いたします。

講義と演習に関しては、講義を極力少なくするように私のほうではスライドをつくっています。まず演習をさせて、失敗をさせます。それで思考を課題に向かわせて、じゃあどうなんだろうということで、学生が考え出したときに講義をするというスタイルにしています。

授業の構成は、私のほうで迷ったらシンプルにしています。そうしますと、担当教員が工夫を始めてくれるということがあります。迷ったらというのは、90分授業がありますが、大体70分、80分ぐらいで終わるような構成にしています。そうすると、先生方が残りの時間は何しようかと考えてくださるんですね。それで個人的体験とかというものを話し始めると、それが実に学生に好評でして、そういうことがアンケートからわかっておりまして、そう

いう意味で、私のほうではシンプルにしています。結果的にシンプルにしたら多くの先生が理解してくださるようになって、結果的に他大学に輸出した例というものも生じまして、具体的には、関西学院大学なんですけど、ここで2人の先生方が、この教養ワークショップと同じスタイルのものでやっているという報告をいただきました。

先ほどのちょっとスライドを戻しますと、ここの添削は最小限というところですね。実際、授業ではどういうふうになっているかという、このようなスライドを学生に見せています。つまり、先生方に説明をしていただいています。書評にピア評価を取り入れる意味というものを説明するときに、こう言っています。大学では、卒業論文などで学生が書いただめだめなものを、これは私の授業では相当強調しているんですが、一応ちょっと薄くして、だめだめなものをいきなり教師に読ませてはならないと、卒業するつもりがあるなら。提出前にゼミ生同士で読み合わせするのが常識である。常識過ぎて誰も教えてくれないんですよ。ですので、皆さんみずから、例えば1月末とかに期限が設定されたら、10日とか2週間とか早目にお互いで決めて読み合わせをするものなんですよみたいなことを説明しています。

書くという行為は、個人的な作業ではありませんか。いいえ、違います。書くというのは、読者が存在して初めて完結します。説得力のある文章を書くには、読者の視点を持っていなければなりません。グループ活動を生かして読者の視点を学ぶためにこのピア評価というものがあるんですよというところで、これを用いています。これは私の思いなんですけど、ひそかに三重大大学の標準にしたいと思っているということ、ひそかにと言って毎度毎度公言しているわけですね。今この教養ワークショップを受けた学生がちょうど3年生になっていますので、卒検なんかで各先生方には徐々に浸透していくかなあというふうに期待しております。

科目運営上の苦勞です。教員間の意思疎通が、私が最も心を砕くところです。大胆な変更がなかなか難しくて小修正を繰り返しています。また、コミットメントに差がありまして、熱意のある先生は非常にフィードバックを下さるんですが、そうでない先生方もいらっやっています。これをどうするかということ、これを常々悩んでいます。また、入れかわる担当者が毎年数名ずつ任期つきとかで各学部から来ていますので、入れかわりの先生にもいかに不安なく担当してもらえるかということにも心を砕いています。

また、これは運営面についてですが、そのほか、授業の内容面について先生が特に迷われるのが、いかにグループ活動を活性化するかということについて、いろんなコメントをもらいます。まずは、教員になれてもらうということと、あとは学生自身の問題ということがあります。このときに、どんな先生でも、すぐにどんな学生に対してもできるようにということで、私のほうではいろんな手法があるということ、聞いてはいるんですけど、それを取り入れて、どんな先生でもできるようにということで、提供をどうしたらいいかということ、悩んでおります。

また、再履修生の扱いですとか学外評価、中期計画に関する報告、広報に関する仕事、あとはこういったほかの大学に呼んでいただくということもあるんですが、そういった仕事が全部私のところに来ますので、相当な仕事量を今のところこなしているというふうには認識しております。ようやくここで安定してきた感があって、レールの上に乗ってきたかなあというふうに感じております。

全学に提案していることとして、ここでは3つちょっと紹介したいと思います。

まず、読書シートに基づくグループ活動。これは、正確な記録、実験ノートをとるような授業があったら、ぜひ先生方、学生はすぐできますので、やらせてみてくださいということで全学に提案しています。例えば、研究倫理が最近盛上がっていますが、実験ノートをもとに他者でも実験が再現できるということが言われています。それが、我々がやっている読書シートでも、お互いのをチェックしているので、もしも必要だったら、すぐに読ませられるような、学生はなれていますよということで紹介しています。

2つ目がピア評価に関するもので、グループ学習、これもグループ活動を行う授業にはすぐ取り入れられますということで紹介しています。特にグループ学習をやると何が問題かということ、フリーライダーが発生することがありまして、楽をしようとする学生をいかに解決するかということですね。それに対して、これを取り入れてもらおうとすぐに解決できるということです。

ピア評価のもう一つ、書評に関しては、文章を書かせる授業、例えば卒業研究などがありましたら、教養ワークショップで学生はなれているので、締め切りを1週間とか2週間とか早目に設定してもらえれば、学生はお互いに行えるようになっていきますので、ぜひ取り入れてくださいということで提案しております。

ここからは、関係者の感想に関するものです。

まず、学生の授業アンケートに関するものですね。これは残念ながらお配りはちょっとできないので、スクリーンだけということになります。2016年度の前期と後期になります。これで、前期よりも後期のほうが総合的に若干、総合評価が下がるのはしょうがないんですけども、その中でもとりわけ必修科目が非常に低いということになっております。この低いことの理由としましては、我々のほうで認識しているのは、授業外学習時間が多いからということで、一応認識はしております。教養ワークショップに関しましては、どのくらい勉強していますかということのアンケートをとるんですが、最も勉強させる時間が長いわけですね。それが残念ながら不満につながっているのかなあとということで考えております。

ここから紹介するのは、いわゆる授業アンケートとは別に学生の感想を聞く機会がありまして、そこで集まってきたものをここで御紹介いたします。

Moodleという掲示板で記述させたものです。ここに記入してくれたのが605名ということで、強制はしていませんけど、かなりの数の記入がありました。悪いコメントも結構遠慮なく書いてくるんですね。あと口頭では言わない学生もいて、例えば終了時刻がぎりぎりだとか、暖房つけてという文句をこういうところに書いてくる学生って、暖房をつけよとか、寒いかということのは、その場ですぐに先生に言えば解決しそうなんですけど、学生さんはこういうところに書いてくるんだなあということを感じます。こういったことを分析の上、FD研修会のほうで共有して改善につなげています。

まず、そのとき私のほうで分析しますが、色づけをちょっとしました。よかったものは青文字、問題・改善等は赤文字、それと、私のほうで気づいたことに、過去自分とか受講前の授業の評価というものがありまして、それを水色の文字にしています。

そのほかに、今後の決意、この授業でやったことをもとに頑張りますみたいなものがあるんですけど、ちょっとここでは紹介するものはありません。

ここで触れたいのが、この水色に関するものです。過去の自分ないしは授業に関する評価、基本的にはこの授業、非常に評判が悪いということがここからわかります。読書とか文章執筆に不安を抱えている例があります。教養ワークショップは大変そうだとまず書いて、その上で実際に受けてみたらどうだったというようなところを、私のほうでは非常に気にしたわけですね。この水色に色づけしたような感想が全部で58件ありました。成長したものの、つまり水色から青色に変わったのが38件、先生のおかげで何とか、授業そのものは大変だったんだけど、何とかクリアしたよというのが17件、あと、最初と印象が変わってなくて、とんでもないという意見が3件ということになっていて、総合的には大変な授業なんだけれども、おかげで成長したというふうに我々は捉えております。

まずは、評判が非常に悪いということを示す例です。お配りしておりませんので、読み上げさせていただきます。

私はふだん新書などの本を読む習慣がなかったので、今回の授業を通して本を読むことへの抵抗は緩和された。また、著者の意図や本を通して伝えたいことなどを読み解くスキルがついた。本を読む習慣が今までありませんで

したが、この講義で本を読み、考える楽しさを学べました。他学部の人とかかわる機会が余りないので、最初は緊張しましたが、最終的には教養ワークショップがあつてよかったなあと思いました、余り楽しくない授業だと聞いていたけど。という非常に興味深いコメントを遠慮なく学生は書いてきます。

先生のおかげでつらくはなかったです。ですので、こういう場合は、授業そのものが実際はよかったというよりは、先生のおかげでというような書き方と私のほうでは受け取っています。

大学生は、最低限まともな日本語を扱う能力、コピペに関する知識などを持っていて当然と思っていたので、こんなことを授業でわざわざやるのかと正直驚いたというような、これは最初の印象と変わらなかった例というものも幾らかもらっています。

きょう、もう一つお示しするのが、FD研修会でこれを読み上げましたら、若干ちょっと目頭を熱くしている先生もいらっしまったようなコメントになります。

この授業の評判は余りよくないです。先輩や知人からも面倒くさいとしか聞きませんでした。正直、僕は読書が大嫌いです。本を全く読みません。今は動画などが気軽にネットで見られるので、情報源はいつもネットでした。今回、初めてと言っていいほど本を真剣に読みました。もちろん、読みなれていないので進むスピードも遅かったと思います。ですが、真剣に読みました。読み切りました。何度も読み直しました。自分の選んだ新書がおもしろいか、そうでないかは置いておいて、普通に読むことがおもしろかったです。読書の楽しさをつかむことができました。

ここから青になるわけですね。

また、この授業のいいなあと思った部分は、班員と一緒に授業を受けている仲間に自分の書評を評価してもらうことです。厳しいことはたくさん言われました。でも、そのたびに客観的に見られたのです。自分に気づけなかったことに気づいたりできました。3回くらい見ってもらうことで、自分の書評が完璧に近づいていくのがわかりました。また、時間を置いて見るのも一つの手だということにも気づきました。この授業はとても楽しかったです。

ということで、若干ちょっと眼鏡を外している先生がいらっしまった、こんなことをやって。という感想が得られて、これそのものが非常によく書いているなあということで、先生たちが感激してくださるコメントが得られました。

そのほかの興味深いコメントです。今までレポートを書いても評価がわからず、自分のレポートに必要なものが何なのかわかりませんでした。この授業は、自分の文章を客観的に評価してもらえてよかったと思います。人に読ませる文章を書く機会をいただけたことは、とても貴重な経験。違った人からの意見をもらえるということは、この授業の強みだと感じた。ということで、こういったことは、我々の狙いをきちんと理解してくれている学生が結構いるんだなあということで安心しました。

あとは、赤字は改善するべきというコメントなのですが、例えば前期にやるべきで、前期のほうが絶対に好ましいという、評価してくれているがゆえの改善案。

あとは、正直なところ苦痛だった、もうやりたくない。授業の密度をもっと濃くしてほしかったと。これに関しては前向きな提案です。

班員の最終稿が読みたかったという、これは授業の構造に関する改善の提案というものもありました。

また、FDで積極的に還元しているものに次のようなものがあります。教員の対応によって、学生が授業を好きになるという場合があります。ですので、授業そのものが大変だかつまらないということはあるんだけど、それでも学生が先生のおかげでと言っている場合があります。あと、ありがとうございますとか感謝を述べている場合があります。その理由として、こういったことが上げられます。丁寧で明確な説明・指示があつたので

よかった。これは、授業の内容じゃなくて、先生の教育手法ということです。教員の性格、授業の雰囲気がよくてよかったと。

優しいとか、柔軟というものに関しましては、例えばこういう意見がありました。ストレスしかたまらなさそうな教養ワークショップで、このコメントを書いてくるのは、ちなみに掲示板で匿名じゃないんですよ、これ。その学生は、それを知っていて書いてくるんですけど。比較的やりやすかったのは、先生のおかげだと思います。ですので、授業そのものは余り評価していなさそうなんですけど、先生のおかげで何とか乗り越えたと。

あと、楽しいとか、おもしろい、明るい、情熱的、元気というのも学生が積極的に評価してくることで。私は全く本を読まない。ほかのクラスの友達の話の話を聞いていると、とても授業がつまらないという声が多かったのですが、私は楽しかったので、〇〇先生のクラスは正直当たりだなあと思っていますというコメントもありました。

あと、一般的にすぐに改善できそうなものとして、声かけ、書評の指導でなくても、温かい励ましとか、前日のリマインドというのは非常に評判のいいものとしてアンケートのほうでは得られております。

また、悪いものとしては、終了時刻オーバーとか、声かけをしないということは学生の評判が非常に悪いです。ですので、名指しはしないんですけども、先生方で、もしも心当たりのある方は、こういったことで授業の改善、総合評価がすぐに上がる可能性がありますので、先生方よろしく願いますということでFDのほうでは共有しております。

ここから、これは最後のスライドになりますが、2枚で、担当教員のコメントになります。

何となく学生の成長の手応えはあると。この何となくというやつがちょっとひっかかるんですけど。この授業で文章作成の力が向上したとは思えないという意見を学生からももらいました。残念でしたが、私もこの学生の意見は理解できます。ということで、一定数こういう、なかなか協力してくれない先生ないしは反感を持っている先生というのもいらっしゃるんですけど、そうすると学生のほうからも、この先生は何でいつもむすっとしててとかというコメントが同時に上がってきまして、ああ、やっぱりちょっとこれはよくないんだなあということも、こちらの運営側としてはわかります。

昨年度よりはやりやすかった。教育内容としては、かなり熟成されてきた。時間配分、講義の量は適切だったと思う。全部で二、三冊書評をさせてもいいとか、あと前半にもっと書かせてもいいというのも、これは改善案としてもいただいておりますが、結果的に提案を受け入れることはできておりませんし、受け入れるのもなかなかちょっと難しい気が今のところはしております。

授業運営方法について、懇話会という、お昼御飯を食べながらというのを週に2回設けているんですけど、こういうところで、自由参加のところで情報交換が役に立った。

あと、ワークシート集のおかげで授業前の準備時間が短くできた。

あと、サンプル書評をあと5つぐらい配付したほうがいいんじゃないかという意見もあるんですけど、これも印刷費を抑えるという点で実現できておりません。

論評部の書き方の部分が加わったけれども、論評部のできにばらつきがあり、学生のセンスに左右されている感が否めないというのもいただいておりますが、これは成績のほうに優劣をつけてくださいということで対処しています。

読書シートを互いに読ませるという取り組みはとてもよかった。学科混成は、まざるのは非常によかった。

あと、以下は成績に関してです。

複数の評価観点を行うことを授業中に何度か説明したので、学生も理解していたように思う。班員のピア評価は、これは態度面ですね、教員の評価ともほぼ一致していて、自信を持って班活動の部分を成績に反映させることができた。

あと、残念ながら、この書評内容のピア評価が教員の評価とかなりずれる傾向があったという報告も感じております。これは私も認識するところです。教員からすると、不合格レベルの書評がピア評価などでは8などの高評価を得ていたり、逆にピア評価では6や7という評価だった書評がベスト書評として選出されている例もある。学生は読む書評の数が少ないので、このような隔たりは仕方ないのかもしれないというふうなコメントも先生からはもらっています。

ということで、ざっくり紹介をさせていただきまして、私のほうからは、この授業を運営することによって気づく点などを紹介させていただきました。

1時間の時間をいただきましたので、ここからは、また何かありましたらお気軽に御質問などをいただければというふうに思います。ひとまずありがとうございました。（拍手）

【司 会】

どうも先生、ありがとうございました。

それでは、これから質疑応答のほうに移らせていただきますので、お気軽に挙手をされて、マイクをお持ちしますので、よろしくをお願いします。

個人情報を含むため削除

個人情報を含むため削除

個人情報を含むため削除

個人情報を含むため削除

個人情報を含むため削除

個人情報を含むため削除

【司 会】

では、あと一つぐらいございましたらお願いいたします。

よろしいでしょうか。

【和田正法氏】

あと若干の補足なんですけど、我々のほうでも、いつでも授業の参観というのは受け入れておまして、もしも御関心のある先生がいらっしゃいましたら、私のほうへ連絡をいただくか、実際に授業をやっているのは後期の火曜日と木曜日になりまして、ここでしたらどの授業でも、すぐに参観いただけるようになっていますので、もしもあつたら、ぜひ御一報を下さい。

【司 会】

ありがとうございます。

よろしいですかね。

そうしたら先生、ありがとうございます。もう一度拍手をお願いします。（拍手）

【和田正法氏】

ありがとうございます。

【司 会】

では、閉会の挨拶を野田副学長にお願いいたします。

【愛知教育大学・カリキュラム改革担当・副学長（野田敦敬氏）】

それでは、失礼します。

和田先生、たくさんの資料、それからテンポのいいお話、ありがとうございます。

実は、我々もことしの1年生から教養科目を改変いたしました。本当に今いろいろ問題も出てきまして、苦しいでおるところでございますけれども、3年目ということで、本当に最初の初年度のスタートを切られたときには大変だったろうなあというふうに思います。その中でも、やっぱりいろいろ研修会を開かれたり、教員が共通理解をするというところが、ちょっとまだまだ私どもはできておりませんので、そういう意味で、私の立場としても大変勉強になりました。

このアクティブ・ラーニング科目というのは、うちでいうと初年次演習なのかなあというふうに思いますけれども、実は15回あるうち5回、ことしから本格実習をいたしましたけれども、全体での講堂に集めてというような取り組みをして、あと10回を各教育組織に任せています。うちも単科でございますけれども900人ちょっとおりますので、30ぐらいのグループで進んでおりますけれども、そのあとの10回がやっぱり組織ごとによっていろいろ変わってきてしまいます。それはいいという部分もあれば、もうちょっと全体で共通のところをふやしてもいいという意見もありまして、私は今ぐらいがちょうどいいのかなあというふうには思っておりますけれども、なかなか意見が分かれるところでもあります。

あと、成績のことで、いろいろ共通理解をしながら進めてみえるということで、我々も同一科目はできるだけ幅が少なくなるようにということで、小谷先生を初め努力していただいているんですけど、どうしてもまた幅が出てしまうという問題点も出てきていますので、取り組みについては大変参考になりました。

まず学生の皆さん、卒論で忙しいときにたくさん参加してくれまして、また質問もいただいて、ありがとうございました。

それから先生方、センター入試の説明会が2時間以上ありました。その後また1時間半ということで、遅くまで本当にありがとうございました。我々も、教員養成ですので、教師教養科目というのを立ち上げまして、12単位ことしから実施することにしていきます。教養教育全体では25単位だったところを30単位、あるいは31単位という形でふやして実施をしておりますので、いい情報を聞かせていただきましたので、また参考にさせていただければなあと思いました。

遠くからありがとうございました。（拍手）

【司 会】

それでは、これで本日の講演会を終了いたします。お疲れさまでした。